

# ふなやま

## 第17号

### 誰もが幸せな社会を目指して

六人部中学校 三年 吉良 日花

人間はだれもが幸せに生きる権利を持っています。その象徴が今の私たちの生活です。戦争もなく、食べたい物を食べることができ、住みたい所に住むことができるなど、本当に幸せな生活を送ることができています。

しかし、今の日本では、幸せに生きる権利が侵害されている場面が多くあるのではないかと思います。

私は、以前、ヘイトスピーチについてニュースで見ました。その時、日本人の口から出た言葉は

「お前らなんて日本にいらぬ。日本から出ていけ！」

という言葉でした。この言葉は、在日韓国・朝鮮人の人たちにに向けて言われた言葉です。

私は、その言葉を聞いて、驚きと同時に、

「日本から出ていけ！」

と言った日本人を許せない気持ちになりました。その一言で何人の人が傷

付くのかを考えてみると、本当に許せないし、今の私にはほとんど何もできないという力の無さを感じました。

しかし、一学期にした人権学習を通して、できることが一つ増えました。それは、相手の立場に立って物事を考えること。そして、互いを認め合うことです。

人権学習で見たビデオの中で、私は疑問に思った一言があります。それは、

「外国人なのによく頑張っている。」

「外国人だから気が強い。」

この、「だから」、「なのに」という言葉は、私たちが思っている以上に人を傷付けています。外国の方は、頑張る人が少ないのか。外国の方は皆、気が強いのか。決してそうではないですよ。

近年、日本にはたくさんの方々が観光に来られたり、働

きにいられています。しかし、働きに来ている人たちがすぐに就職できている訳ではありません。その上に、住む場所もなかなか決まりにくいこともあります。集合住宅等の広告に、「外国の方は入居できない」と書いてあることもあったと聞きました。

このようなことが起こっている背景にも、日本人の外国の方に対する偏見があります。

「外国の方はルールが守れないから入居させない。」

この考え方も、おかしいのではないのでしょうか。

例えば、私たちがアメリカに行つて住むとなったとき、アメリカの決まりなどをすぐに理解することはできませんよ。こうなつたとき

「誰かに教えてほしい。」

と誰もがなるはずですが、しかし、言葉が分からないと伝えることができません。

この状況と同じように日本に来た外国の方も、

「教えてほしい。助けてほしい。」

と思つておられるのです。

誰もが幸せに、そして、平等に生活するために、相手を思いやるのが大切なことです。

ヘイトスピーチも同じで、相手を思いやる気持ちがあれば

「お前らなんかいらぬ。日本から出ていけ！」

という言葉は口から出ないはずですが、

また、今年の五月には、ヘイトス

ピーチ対策法が可決されました。この対策法は、「不当な差別言動は許されないことを宣言」しています。しかし、憲法が保障する表現の自由が損なわれるという意見が出ているのも現状です。この現状を見つめ直し、改善していくことが、これからの日本を担う私たちの役割の一つなのではないのでしょうか。

私たち自身は幸せだとしても、周りには偏見や差別で苦しんでいる人がいるということをまず知らなければいけません。

そして、そのことを知った上で行動に移すのです。始めは、一人では無理かもしれませんが。そんな時は仲間と一緒に行動してみてください。きつと、協力してくれる人が一人、二人と増えていくはずですよ。

また、互いのことを思いやる気持ちを持つことも大切です。相手のことを思いやることで優しさが芽生え、自然と手を差しのべることができると思います。

私たちができることは小さなことですが、それがいつか大きくなり、誰もが幸せな生活を送ることのできる世の中になっていくと私は思います。



# 野球を通して学んだこと

六人部中学校 三年 大 西 実乃里

私は、野球が好きだ。特に選手としてボールを投げたり打ったりすることが好きだ。今年の夏の総合体育大会では、野球部で三年間一緒に頑張ってきた仲間と共に、グラウンドに立って戦い抜くことができた。

私は、小学校三年生の頃から野球をしている。学童野球では、監督やコーチをはじめチームの指導者から、目の前の勝利のためだけではなく、これから先、長く野球ができるような技術指導を受けた。そのため、私達は自分の得意なことを生かせるポジションで準備に就き、個人の持ち味を生かした打順でバッティングをすることができた。

学童野球を終えても野球を続けたくなった私は、中学校でも、すでに二つ上の兄が所属していた軟式野球部に入部した。顧問の先生の指導のもと、先輩や仲間たちとの練習は、楽しいものだった。今、私が野球を好きだと心から思えるのは、これまで私の野球に関わってくれた人たちのおかげだと思う。

そう改めて思ったのは、今年の夏、京都府内で野球をしている中学校の女子と話していた時だ。ある人は小学校の学童野球チームに所属していた時に、「女子」という理由で、一度も公式な試合に出ることがなかったそうだ。「野球は男子がするスポーツ」というイメージからなのか、女子が試合

に出ることで男子が試合に出られないのが嫌なのか、指導者が彼女を出場させなかった理由はわからないが、小学校低学年からチームに所属している彼女にとつて、チームの一員としての力を発揮する場所を一度も与えられなかったのは残念なことだ。もっと残念なことは、そのような環境に置かれていた人が一人ではなかったということだ。

私の経験の中でも残念なことが無かったわけではない。自校の顧問ではない人に指導を受けた時のことである。練習項目の中で、女子は男子より体力がないと思われたのか、走る距離を短く設定された。それまで仲間と同じように練習してきた私は衝撃を受けた。仲間と同じように練習できないことが悔しかった。男女では成長の速度が違うので、できることに差が出てくるところもあるだろう。実際、中学校に入ってから成長に関して男子との差を感じることもあった。その指導者の行動は、私達のことを気遣っているものだったと思うが、初めから女子にはできないという憶測で判断してほしくなかったと思う。

他にも悔しかったことがある。試合中に、相手の応援席から「女子なのにすこいね」「女子だから仕方がないね」と聞こえてくると、「女子だから」と

いう一言で自分の限界を決めつけられていると感じる。

今年の甲子園でも、大分の女子マネージャーがユニフォームを着てグラウンドで練習を手伝い、大会本部から制止されたというニュースがあった。彼女は、今まで野球部を甲子園に連れて行きたいと、マネージャーとして支えてきた仲間である。彼女も同じグラウンドで仲間と一緒に同じ時間を過ごしてきたのだろう。彼女のために用意されたユニフォームには、仲間の思いが詰まっていたのではないだろうか。今回の大会本部の危険を回避するという考え方は正しいと思う。しかし、男子女子に関わらず、一緒に戦ってきた仲間がグラウンドに立ってないという点に関しては、もっと深く考えてほしいと思う。

現在、日本の総人口の約半分は男性である。女性だからという理由で女性に悩んでいるように、男性にも悩んでいることがあるはずだ。例えば、力仕事は男性がするものだという考え。人はそれぞれ得意なこと、不得意なことがある。力仕事が苦手な男性もいるし、細かな作業が得意な男性もいる。そんな中で、男性だから力が強いと言いつつしてしまうのはおかしいと思う。性別、見た目、話し方、経歴などからくる固定観念を持たないことが大切だ。私たちの学生生活の中でも、学校行事の準備などの時、性別で仕事を分けるのではなく、得意とする人へ仕事を頼むほうが効率的だし、与えられた仕事ができなくて困ってしまう人も減る

と思う。

と思う。

男女平等や男女共同参画といわれて、いろいろな職業に就きたい人が就ける環境になってきたと思う。異性ばかりの職場に初めて就職することは勇気のいることだと思う。だからこそ、高い志を持って就いた職業を長い間続けられるように、性別に関係なく、その人の持ち味や個性を尊重できる職場や社会にしなければいけないと思う。女性も男性も活動の幅が広がり地位を向上するということは、その分責任から逃げてはいけないし、勉強もしなくてはいけないと思う。私もこれから中学校を卒業し新しい道に進んで行くが、社会の一員として、いろんなことに対して責任を持てるように、たくさん勉強していきたい。

## 編集後記

誰にとっても幸せな地域づくりのためには、人と人との出会い、つながりやふれあいといったことがとても大切になってきます。福祉推進協議会では引き続き、地域の絆を深める様々な事業に取り組んでまいります。

今回、執筆を六人部中学校の生徒のお二人にお世話になりました。心温まる作文をありがとうございました。



岩間からの「ふなやま」の遠望です。



### ◆委員

- 岡本 山下
- 大槻 松垣
- 芦田 水原
- 竹中 梅原
- 茂木